



質問 1 – 我々はどこにいるのか

1-1. 計画中または公表されている目標や、パリ協定、1.5°C/2°C目標の達成、今世紀半ばまでのゼロエミッション社会への移行に対して行われた行動について記述してください。[600 文字以内]

- ① 10 年程前から、「袋を愛でる、海学校、川学校、山学校」という環境学習を地元中学校の総合的な学習の時間に行ってきた。地域住民との絆、雨水の行方、大気の循環をキーワードにフィールドワークを行う。海学校では、日本の重要湿地に選ばれている海岸での生物調査、海の中から海や海底の様子を観察する生物調査。川学校では、BOD,COD、生物調査と地域住民と川との関わり。山学校では、雨水に対する山林の役割と実際の樹木を使つての光合成実験を行ってきた。地域の森林面積からどのくらいの二酸化炭素の固定を行っているのかを算出させ、自分たちの暮らしの中でのエネルギー使用量から算出される二酸化炭素排出量の比較を行ったりしている。
- ② 25 年前から継続してきている国際ワークキャンプは、10 年まえから竹の伐採を始め、一昨年からは、主催団体である NICE を中心にアジア 6 カ国をネットして Stop Climate Change とタイトルして活動の共有と活発化を進めている。当会では、竹の伐採、炭化の後竹炭を木質ペレット大に粉碎し、石油ストーブと同じように安易に使用できるように実験を進めている。私の自宅での風呂や暖房に竹炭を用いている。
- ③ また、私の正業は、紙漉きであるが、地元産のイ草の星状細胞を用いた壁紙の開発に成功し、第二回ものづくり日本大賞優秀賞をいただいている。この壁紙は、調湿能力をもっており、同じ気温であれば、体感はずっと涼しく感じる事ができる。バイオマス 90 マーク取得済み。

1-2. 上記の目標に対するこれまでの進捗（成功した事例、目標との乖離など）を記述してください。
[600 文字以内]

- ① 中学生のエネルギー消費から算出する二酸化炭素量と地域の森林による二酸化炭素の固定量の比較は、できている。しかし、具体的な活動には至っていない。
- ② 竹を伐採し竹炭にしていく活動には、国内外を問わず中長期間の滞在型のボランティアたちが 3 ヶ月ごとに 3~4 名コンスタントに集まってくる。彼らの多くは、最初に自分が水俣に来るまでの航空燃料と同じだけの竹炭を作ろうとする。活動の炭素固定について意識化されるようだ。2018 年の 1 月から地元保育園で試用実験を始めた。結果は、いくつかの問題を明らかになったが概ね良好で次の冬も試用実験を継続する。私の自宅での暮らしは、太陽熱温水器とガス、竹炭でほぼ熱エネルギーがまかなえている。
- ③ 使用者からは、初夏においては、冷房を試用しないで過ごせる等の意見は、いただいているが、やはり、ビニールクロスなどと比べ単価が高くなる為、徐々にしか普及しないが、公共的な建物などには、利用いただいている。

1-3. これまでの定量的な成果（緩和・適応・レジリエンス・財務/資金/ファイナンスなど）に関して記述してください。[600 文字以内]



質問 2 – どこへ行きたいのか

2-1. 1.5°C/2°C目標の達成や、今世紀半ばまでのゼロエミッション社会への移行における、貴組織または貴業界の（果たす役割に関する）将来ビジョンについて記述してください。[600文字以内]

循環型地域社会の構築とネットワーク作り。九州の多くの自治体で不要材となっている竹の扱いに頭を悩ませている所は多い。当会では、過疎高齢化が進む中、都市部や海外からのボランティアを募り、竹炭を作る活動を進めている。企業などの努力によって様々な物の電化が進む事を前提に、カーボンオフセットの前に化石燃料に依存しないカーボンニュートラル、循環型地域社会を目指す。

2-2. 1.5°C/2°C目標の達成や、今世紀半ばまでのゼロエミッション社会への移行について、新たな公約や目標について記述してください。[600文字以内]

- ・竹を中心に草や木など植物を炭化させ、炭としてストックできるようにする。
- ・粉碎、固形化など炭を扱いやすい形状にする
- ・燃焼器具の開発
- ・労働力不足を補い、過疎高齢地域の活性化のために都市部や海外からのボランティアの受け入れの促進
- ・公的施設を含め、地域で理解・活用する人を増やす。
- ・なるだけ費用をかけない
- ・田舎の地域同士でネットワークを作る

2-3. 持続可能な開発への貢献を含め、上記の公約・目標が達成されることで実現される良い影響について記述してください。[600文字以内]

- ・カーボンオフセットに対する意識が高まる。
- ・竹林の整備によって、早撮りの筍などの新しい収入が生まれる。
- ・滞在者による地域の活性化
- ・輸入化石燃料に頼らない暮らしの実現
- ・循環型地域社会の実現



質問3 – どうやって行くのか

- 3-1. 貴組織のビジョンと目標達成のために、国連気候変動プロセスがどのように役立つことができるのか記述してください。また貴組織の行動が、脱炭素社会への移行を促進するためにどのように役立つのか記述してください。[600文字以内]

国連気候変動プロセスは、一般市民からは非常に遠い存在である。市民に伝わってくるのは、複雑で難しい議論があっているという事だけだ。地球の温暖化、気候変動は、今や明確な指摘が無くても十分に体感できる市民にとっての脅威だ。でも、我々にどのような努力や活動が可能なのか解らず、不安だけがかきたてられる。同じ日本であっても、僅かな樹木とたくさんの建物が林立する中で暮らしと建物と比較にならない大量の森林に囲まれての暮らしには、大きな隔りがある。同じ情報を受け取った時に感覚にズレが生ずるのは、当然の事だ。

求められるのは、有効で同意可能な政策なのかキャンペーンだけなのだろうか。150年前化石燃料が伝わる以前、日本は、熱源を薪と木炭に求めてきた。実際に地球規模で考え数値をクリアしようとするには、産業界の努力無くしては考えられない。その産業に支えられて生活が成り立っている我々市民には、何も求められないのか。市民も気候変動に向かって何らかの行動をしたいと考えている市民は、少なくないはずだ。生活に変革をもたらさなければ、この問題は、クリアできないのではないだろうか。

大きな規模で同様の活動を行うには、無理がある。小さな地域コミュニティ毎に地域に合致した活動を創造し、どう評価するかと言った指標が必要だ。

- 3-2. 貴組織が公約・目標達成のための行動のなかで実現した具体的な解決策について記述してください（成功体験や挑戦を通じて学んだ教訓を含む）。1.5°C/2°C目標に沿った事例や締約国のNDC目標達成を支援する事例、非政府主体の野心引き上げや公約強化を支援できそうな事例などを紹介してください。[600文字以内]

Stop Climate Change と題して集まってくれたボランティアたちは、ガスや電気、エネルギー使用に対して、記録し、節約していく努力を惜しまなかった。しかし、参加者の一人から、ヨーロッパから水俣に来るのにどのくらい燃料を使ったのか、その燃料を使って、ここまでボランティアに来て意味があるのだろうかと疑問が呈された。その時、他のボランティアから最初にここに来るまでに使った燃料に相当する竹炭を作ろうと言う提案がされた。日常全般を考えると難しくなってしまうが、このように限定すれば、おおよその数字は掴める。地球規模で考えれば、僅かな数字でしかないが、このような設定をすると人間は、けっこう努力しやすい。竹炭は、燃料として使わなくてもいい。地表に散布しても土中に埋めても害は、無い。

- 3-3. 貴組織の公約・目標達成に有効だった、もしくは役立つような、他のステークホルダー（特に非政府主体や各国政府、国連気候変動プロセスなど）との協力・連携の事例について記述してください。[600文字以内]

・竹林の所有者。放置状態にあると言って良い竹林であるが、ほとんどの竹林は、個人所有であり、その方々の理解と協力無しにこの活動は、成立しない。



3-4.非政府主体の行動を拡大するための機会や、さらなる行動の阻害要因に対処する方法について、貴組織がこれまでに（公約の元で）行った行動をもとに、記述してください。

[以下、それぞれ 400 文字以内]

- 政策手段

対象竹林面積の拡大し、受け入れるボランティアの定員を増やす事で、地域社会へのアピール力を増やした。

- 協働／協力機会

カーボンオフセットやカーボンニュートラルをテーマにした集まりではなく、地域作りや地域興しと言った暮らしに密着した集まりで活動を話題にしたり、活動報告の中に炭素固定の話を組み入れる事で関心を持つ人との関係を形成してきている。

- 現時点までの経験や進展から学んだ教訓

・人々の価値観がお金で一元化している。ボランティアという特定の期間であれば、その価値観から離れる事ができる。大量生産大量消費というライフスタイルから脱出するプロセスとして、滞在型のボランティアと言うのは、有効だ。

- 公的資金・民間資金の活用事例

- ・セブンイレブン財団
- ・再春館一本の木財団
- ・水俣芦北雇用促進事業

全て、脱炭素社会のためのプログラムではない。

- 上記の取り組みが、各国政府や国際的な取り組みなどによって実施されたときの、非政府主体への良い影響について記述してください。また、その場合、取り組みをどのくらい推進することができるのか。

・エネルギーを輸入に頼るのではなく、自給自足する。政府や国際機関が労賃をサポートして非政府主体が実施するような取り組みになったら良いと思う。

「気候変動への取り組み事例（ストーリー）」投稿用テンプレートの質問事項は以上です。

補足資料などは、メール添付にて事務所（talanoa_japan@env.go.jp）宛にお送りください。